
ゼルダの伝説 陰陽の楔

夜摩祈,きょう助

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゼルダの伝説 陰陽の楔

【Nコード】

N0697T

【作者名】

夜摩祈 きょう助

【あらすじ】

太平の均衡は脆くも崩れ落ちた。聖なる烙印を弓手に携えた新緑の御子は、当代の救世主として浮世を安寧に導く運命を握っていた。いつ崩壊するかも計り知れない平和。無情にも神より与えられた天運は頑強な鎖と化し、御子を日に日に束縛していく。そんなある日、ついに世の太平が脅かされた。例により闘争へ駆り出された御子は、辛くも首魁の術中へと嵌ってしまいう。目覚めたとき、御子の前に踏ん返り返っていたのは、月光に照らされた瓜二つの面持ち「陰ノ自分」であった……。昼夜の人格を隔てられた『ふた

りの御子』が織成す幻想東洋ファンタジー。【傾向：完璧オリジン
ル設定です。時代背景はトワプリより何百年も経た別次元的世界。
作者の好みで男性キャラが比較的多く、恋愛傾向は全くありません。
また、流血表現や鬱っぽい描写も頻繁に現れますので、ご了承ください
さいませ】 原作を知らなくても問題無いように書いております！

00・黒白の真理

光と闇、明と暗、生と死。

これら両極を白と黒に置き換えようとする“心理”が在る。

勝利と敗北、悲観と楽観、積極と消極。

これら双方を白と黒の象徴として括ろうとする“思想”が有る。

希望ある未来と、絶望する過去。

これを単純に『白』と『黒』とに分けることは容易い。

しかし過去を浄化して未来への憧憬を『白』とするならば、過去から未来を探求しようとする感情を『黒』と呼べないだろうか。

3

『黒白』^{くわくぱく}という言葉霊が存在する。

これ即ち、過去と未来を踏まえた、今現在を表す色彩だ。

白と黒は「是非」や「正邪」を問うものでなく、

共に混在し併走していくものだ。

「陰」が大地や月光、表からは決して視えないものを称し、

「陽」が天空や日輪、裏を返した明るみを顕すのと同じ様に。

生まれてから死ぬまでずっと一緒　相生^{あいあい}とは良く云ったものである。

陰陽黒白をその身に宿し、平野を駆ける、背丈の低い小柄な姿が

ひとつ。

……いや、極一握りの人間には、その矮躯の隣を共に行く“別の者”が視えるのかもしれない。

瓜二つな面持ちは、同じ刻に生を受けた二卵双生児のそれ。

しかし彼等は双子に　とかく人間に非ず。

破滅を末路に失墜してしまつた浮世を太平へと救い上げ、安寧に導くことを義務付けられた運命を背負い、されど決して助けなど求めず、だからといって失敗を恐れない気高く強きこころ。

先祖代々から受け継ぐ聖なる三角形を掌に、白銀の剣を振るう、^{ユメ}勇猛なる容姿。

果て無き歴史に刻まれた救世主のそれを想わせる、金色の髪色と玲瓏な瞳。疾風に翻る衣は新緑。

彼こそが、この時代に生み落とされた「聖三角形」を宿す御子。

由緒有る当代　　陰陽の勇者、『リンク』である。

く色の風景　空と水　（青菁社）より一部引用く

00・黒白の真理（後書き）

あ、あー……、マイクテス、マイクテス。
自分はシヨタコンでありシスコンであります。

あ、あ、あー……………あれ？ 電源入ってる……………？

（マ・ジ・で・か（。・。・））

つという下らないオープニングは終いと致しまして。

こんにちはorこんばんは。はたまた時間帯によっては御早う御座います。

ついうっかりちゃっかり出来心で書き始めてしまった新連載。こんな妄想の産物にわざわざ足を運んで戴き、誠に恐悦に存じます（*
^ ^）

……………あ、『誤』アクセスですよ、解かりますww

今回の同人小説は完全完璧なシリアス設定になってしまったわけ
して……………

書いている内はトワプリの数百年後の話的なものになっていたの
ですが、

執筆途中ダーク×リンクのCPにすっかりべた惚れしてしまい、
それ相応の主人公達&設定のため改変を付け加え続けた結果、
別次元的&俺得な同人駄作品と成り果ててしまいました（、。、）

テーマ的にもシリアスなもの。恐らく筋的にも暗めの話。

ギャグセンスが皆無なもので、あまり面白みのない駄作になってし
まいそうです（、。・。・、）

いろいろセンス満載の友人に訊いて頑張っている所存ですけど、
やはり笑い転げられるようなものにはならないかと……………；

こんなチキンな筆者と駄文駄作で宜しければ、これからも立ち寄って戴けると何よりです。

更新速度は基本的に亀。もしかしたら亀より遅いかもしれませんがど（）

尚、感想や評価は強制しません。ですがもし良心から一言でも送って戴けた場合、ワタシきょう助が布団を転がりながら発狂しますw

w
w

そして最初に謝罪しておきます。

こんな作品を書き始めてしまい 申し訳御座いませんでした！！（

大泣

では、今後とも宜しく願いますへ（）。*（）ノ

01：霧滴に侵された森*1

『伝説』の彼方に。

世界の果てとも呼べる、理想の大地が広がっていた。

朝日が昇ると同時に止んだ雨は、しかし数多の小池を地に残していった。

折り重なった葉という葉が差し込む光りを容赦なく遮り、密林中は常のように薄暗く、湿り気を帯びた空気は腐臭ともとれる臭いを放ちながら地の近くを蔓延っている。

朝露と雨の雫を孕んだ水滴が葉から零れ落ちては、先刻まで雨が降っていた余韻を示すかのように、小池の中心に輪を描いていた。

幾つもの小さな波紋を広げていた水面が、突如無粋な闖入者によって掻き乱される。

革靴が濡れるのも構わず気忙しげに通り過ぎたのは、差ほど年端もいかなない少年のものであった。

泥にまみれた靴は水分を含んで色濃く変色した新緑の衣に続き、重く湿ったそれは土塊や枯れ葉を伴って素肌になつとりと絡み付い

て来る。

本来とは遠くかけ離れた姿。それもこれも、この密林に足を踏み入れたときから変化してしまったものだ。

そんな容姿にも拘わらず、色濃くなつた衣の上に乗っている面持ちには、苛立ちというよりも、禁じ切れぬ緊張に引き吊れていた。

王都より何キロも南下した無法の土地。つまり、それこそが今回の現場でもあるこの密林だ。

そもそも、此処ら一帯の殆どは未だ《陰族》^{いんぞく}によつて未開拓なままとなつていた。

王都から割と離れているし、地質もそれほど良好ではない。城の管理が手薄になつてしまふのも、無理はなかつた。

それが徒となつてしまつたのか。
行商人の馬車が近道のため通つたルートの中に、かの密林も入つてしまつていたのだ。

樹海や山道などといった未開拓な土地には、少年のような《陽族》^{ようぞく}の永遠なる敵対者陰族が跋扈している。

彼等陰族は人外異形。それ故に冷酷非道であり、悪質なモノでは人喰いの性も有ると聞く。

行商人の多くは盗賊などから身を護るため護身用の武器や用心棒を雇つていることが常なのだが、不幸にもその行商人は用心棒はおるか武器の一切も所持してなどいなかった。

丸裸のまま危険極まりない無法地帯へと立ち入ってしまったのだ

から、いやはや、その勇氣はまったく見上げたものである。

だが、結果として彼は勇猛なる衛兵に溺死体として助け出されることになったのだが。

それも、ただの溺死体ではない。

臓腑が無いのだ。

五臓六腑中、半分以上が。

心の臓より下。そこだけが、何者かに喰い荒らされたかの如く。

少年は可能な限り気配を押し殺し、慎重に歩を進めていた。

時折鼻腔を突く悪臭は、恐らく辺りに点在する沼から発せられるものだ。

未開拓なままである故に、彼の手許には地図など存在しない。

感覚に任せ、本能を頼りに、ただひたすら足を動かす。目的地は近い。頭の端にキンとした痛みを覚えた。

別段、彼がこうした迷宮に訪れたことは初めてではない。

王城直属の《ガーディアン聖騎士》にその名を連ねた者は、強制的に城より命じられた任務を遂行しなければならず、地位と富を引換に、彼等は拒否権や休息を失う。

近辺で闘いが起これば駆り出され、異端者が居れば有無を問わず命を奪い、陰族の領地で被害があれば、構わずそこを焼き払う。

修行の身と言えど、王より騎士団の名誉を賜ったならば、当然任務とあらば出なくてはならない。

殊に陰族が怖いわけでも、薄暗い湿地帯に恐怖を感じるわけではないのだが、彼は、自身ですら判らない底知れぬ不安に苛まれてい

た。

胸騒ぎ。虫の知らせ、か？

それとも、先日脳裏を過ぎった地獄絵図に感銘を受けているのだろうか。

募る思いはやがて焦燥となり、少年の背中を後押ししていた。

行く手を阻む大小様々な弦。それらを退けるため持参して来た短刀を握り締める弓手は、まだ真新しい包帯に包まれていた。

寒さを防ぐためではない。

もつと別の、人目に曝すことを是としない禁断の代物を布によって覆い隠すかのような。

従人^{ただひと}であれば気兼ねせず背負う必要の無い枷。それを、少年は余りに残酷な方法で永久的に負わされることとなったのである。

天運。神より命じられた宿命。それを果たすためだけに生を得た、悲しき御子。

少年は名を、『リンク』 《巡り渡る輪廻》と云った。

ぬかるむ足場に気を取られつつ、木々に捕まりながら懸命に前進していたリンクは、不意に強くなった刺激臭に思わず鼻を押さえた。すぐ脇を見れば、小さいながらも毒々しく泡立つ沼が口を開けている。

岸部の草木は毒気にやられたのか茶色く萎れ、なにかの残骸なのか明らかに腐敗した異物が隠されることなく曝されていた。

さすが無法地帯。なんでも有りなようだ。

陰族の領地と陽族の領地がこれほどまでに違うのは、偏に知能の発達によるものだと彼は考えていた。

陰族は比較的野生に特化した生物であり、彼等の中には秩序や掟などという類が一切無いのだという。

正に弱肉強食の世界。

無慈悲な彼等は、故に迷い込んだ例の行商人を残忍に喰い殺したのだ。

奥に進むに連れ、従でさえ濃密な湿気が徐々に息苦しいものへ変化していく。

まるで、他者の侵入を頑として拒むかのようだ。

噓せ返るような悪臭に眉根を顰めていたリンクは、ふと自身の周囲に視線を走らせ、晴天の蒼穹を想わせる瞳を僅かに細めた。密林の異変に感付いたのだ。

元来から、人外異形の魔物である陰族はこのような人間やその他の陽族に連なる生物が生活するに適さない環境を好んで群がるはずなのだが、先刻から鳴き声はおるか心配すらないのは異常である。半人前の見習いでも、これにはさすがに不審を抱いた。

……なにかがおかしい。

そんな思考が脳裏を掠めた刹那、リンクの頭上を漆黒の影がサッと過ぎった。

次いで、鋭利な殺気を感じする。第二の襲撃。反射的に身を屈めた肩のすれすれを、刃のような鈍い光りが閃く。

体勢を低くしたまま、リンクが鋭い目付で腰に佩いた剣（けん）に手を掛ける。目の前に再び黒影が迫った瞬間、掴んだ柄を一息に引き抜いた。

鞘走る涼やかな音が辺りに反響する。

一拍置いて、どさりと地に落ちる鈍い和音。

刃を一振りして血糊を払い、リンクは襲撃を試みた異形の全貌を

見下ろした。

其れは、蛙の容をしていた。

但し身長は沼や池の主のように大きく、腹の部分が異様な膨らみを見せていた。

跳躍に必要な発達した足が見当たらない代わりに魚類の尾を備え、広げた手は不自然に長く、蝙蝠や飛魚のものに似た羽毛の無い翼を所持している。

首から胴を一刀両断にしたため、それぞれのパーツは離れてはいるものの、見たことのない不気味な異形の姿を目にし、リンクは軽い吐き気を覚えた。

白濁した双眸。

だらしなく開いた口腔には犬歯がずらりと並び、この異形が肉食であることを指している。

これも、陰族の種か。

切断部から流れ出る液体が密林を満たす腐敗臭と似通ったものだと気付き、リンクは鼻を手で覆い、再び周辺の気配を探った。

こつした小型の生物は群れで行動することが屢々。以前数体の魔物を滅ぼして気が緩んでいたところに大目玉を喰らったため、今回は細心の注意を払う。

鼻は頼りにならないし、視界も沼の毒気の影響が微かに霞がかかり始めていた。視覚も使い物にならないと察し、リンクはすっと瞑目する。

研ぎ澄まされた感覚に全神経を集中させ、使い古された剣の柄を握り締める。大丈夫だ、そう自分に言い聞かせることが大切だ。

静かに眼を開け、再度蛙の骸を見詰める。その瞳は、殺生に対して一切の感情も映さなかった。

「もしかして、群れからはぐれた奴かな。陰族って仲間内にも無情なんだね……」

誰にいつでももなく紡がれる言霊。しかし口頭とは裏腹に双眼は無感動なままだ。

ついと前方へ視線を投じると、木々の間に隙間なく下がった蔓の壁を唐突に断った。短剣より切断力を有する両刃の剣は、男性の腕ほどもある蔓を難無く断ち切る。

待ち構えていたように姿を現したのは、湖であった。

けれど今までと同様に泥と毒水が混濁して斑の模様をつくっており、到底水浴び出来るものではない。

更には湖を覆うかのように、そこだけ霧が発生している。これもまた人体には有害な成分が含まれているようで、腐臭とは違う甘い刺激臭が麻痺した鼻腔をしきりに突いて来た。

無理に息を止め湖畔を覗き込む。強すぎる臭気は肌をも刺激し、頬がピリピリと痛んだ。

「……落ちたら大惨事だなあ、これは。服が汚れるとか濡れるとか以前に」

底無し沼なんてものがこの世に在るなら、これは正にその部類だ。苦虫を噛み碎いてじっくり味わったような面持ちが更に輪を掛け始めた頃、リンクは湖を挟んだ向こう岸に見慣れぬ物体を見付け、両の刃を納めた手で庇ひさしをつくった。

ぼろぼろに朽ちた木の塊か。否、片方が外れているものの車輪らしきものが詰め込まれているし、荷台と思しき部分も見られる。

確か、行商人の殆どは徒歩ではなく愛用の荷馬車を移動手段に使うと聞いた。荷馬車といえど貴族ではない以上、豪華なものは期待

できない。大抵は櫛かしや櫛ならの簡素な造りだ。

「っということは、ここが最深部なわけだよね。で、例の被害者はここで力尽きたと」

正確には、力尽きたというより何者かに無理矢理水中へ引きずり込まれたのだろう。

見た目だけでも異常な毒水に頭から被り、死に物狂いで叫んだ声は外に響かず、決死の覚悟で試みた抵抗も虚しく、呆気なく人外異形共の生き餌と成り果ててしまった悲劇の行商人。

彼の名は『愚鈍』の枕言葉と共に仲間内で語り継がれていくに違いない。

「せめてもの慈悲に、お墓ぐらいは立てておこうかなあ」

勇敢なる男、ここに眠る。

ちなみに遺体は先日運び出されたばかりではあるが。

足許に転がっていた棒切れを手に取り、その先端に懐から抜き出した金朱の紐を巻き付け、地面にトスツと突き立てる。

即席ではあるが、一応ちゃんとした墓標と同じ効果を発揮するはずだ。

用心深い父に半ば強制的に持たされた金朱の紐。陰族の領地にはこうした甲われないまま放置された遺骸などがわんさか転がっているため、少しでも死霊を鎮静させておかないと後々面倒なことになる。

リンクは慣れた動作で柏手を二度打ち鳴らした。

「大体は上手くなってきたけどさ、出来ればこーいうことはしたくないんだよねえ。……さて、」

頭上を見上げると、葉と葉の間からなんと長閑な空が窺えた。

太陽の位置からして、大方、昼を過ぎるか否かの頃か。

密林に入ったのが朝方だったので、実に長い時間、自然の迷宮の中を彷徨っていたことが解る。

従人ならそろそろ悪性の症状が表れる時間帯であろうが、そこは聖騎士としての見せ所だ。普段から好からぬ空気に触れている故、そう簡単には昏倒しない、……はず。

自分はそうであって欲しいものだ、とぼやきつつ、リンクは度々辺りに視線を投じていた。

本当に生物の気配がしないのだ。ここまで虚無だといっそ清々しい気さえする。

行商人はここで被害に遭ったはずだ。なら、この周辺は奴等の縄張りだろう。野性的知性を持つ奴等にとって、縄張りに侵入した余所者はみな食糧だ。

先程から早くかかって来いと言わんばかりに油断を丸出しにしているというのに。まったく、気遣いというものを少しは理解してもらいたいものだ。

もしかしたら、救助の衛兵が侵入したことで怖じ気付いて逃げしまったのだろうか。

それこそ無駄骨の骨折り損だ。父の許に手ぶらで帰れるほど、リンクは勇敢ではない。

「まず殴られるのは必定かな。次に閉じ込められて、こっぴどくお説教を戴いて……」

ズキズキ傷み出した頭に手をやり、うつむと本気で悩み出すリンク。それだけは回避したいものなのだが。

と、その時、足許の水面が一度だけごぼりと唸った。

空気の質が唐突に変わった。張り詰めたような静寂が耳に痛い。突如去来した殺伐とした危機感。けれど、それにも勝る高揚感が彼の思考を満たしている。

時を置かずして間も無く、少年の周りは異形の殺気によって完全に包囲されていた。

茂みから覗く幾対もの狂気じみた眼光が獲物を射抜き、今か今かと同胞が飛び出すのを、尾を振って待ち構えている。

化け蛙の形状をした陰族の名称が《沼蛙》^{リーパー}という水棲の魔物だと今更ながらに思い出し、リンクは唇を引き結んだ。

先程の一匹は、恐らく偵察役であろう。迷い込んだ生き餌の品定め役。好戦的な陰族は、弱者だけでなく強豪も相手にし、より強い力を喰らおうとする。

殺気は徐々に濃くなりつつあった。微かな羽音が木々の上方まで達し、期待の獲物を逃しまいと眼をギラつかせている様が目に浮かぶ。

ごぼり。

響いた鈍い音に、リンクは湖の方へ注意を向けた。

眼前の水面が泡立っている。ごぼごぼと不快な和音を鼓膜に打ち付けながら、大型の犬ほどもある黒影が湖面のすぐ真下へ到達した。停止。

世界中の時間という時間が一気に止まってしまったかのような錯覚に陥る。

瞬間、横に裂かれた大口が水面を突き破り、リンクの目と鼻の先まで迫っていた。

01：霧滴に侵された森*2

弾丸のような速度に反応出来たのは、彼が幾数年にも渡り努力と修行を積み重ねてきたからであった。

不意打ちにも拘わらず、リンクは反射的に身を屈め、沼蛙の襲撃を回避する。

しかしそこに奴等の作戦があつた。出し抜けに突進して来た敵を躲かわすため、リンクの注意は背後の敵陣にまで届かない。特攻の仲間とすれ違い様に飛び出した本陣の沼蛙は、今度は無防備に曝されたリンクの背に襲撃を仕掛けた。

迫る甚大な殺気に寸前で気付き、咄嗟に身体を擦る。が、刃のような切れ味を備えた右翼が肉を掠めた。

右肩に熱。

刹那的に肥大化した衝撃が、リンクの全身を駆け巡った。

辛うじて動く弓手で短刀を掴み、過ぎる化け物へ投げつける。閃光を想わせる速さで中空を疾走し始めた短刀を、沼蛙は旋回して避けた。そのまま嘲笑うかのように上空へと舞い上がる。

「くそッ、速い！」

リンクが忌々しげに吐き捨てた。

飛び道具など所持していない故、空中で留まってしまったら対処の仕様が無い。

中距離では身を躲されてしまう。

「ぐッ………！」

膝が砕け、地に落ちた。

一呼吸ごとに激痛が暴れ周り、鼓動に合わせて鮮血が溢れる。開いた傷口から霧の毒気が侵入して来ているのが解った。

漏らしそうになる声を奥歯で噛み締め、喉の奥底に閉じ込める。

泣いては駄目だ。考える。敵は数に満足しているに違いない。なら、そこを討てばいい。

数を減らさなくては。一気に叩けば陣も乱れるかもしれない。

呼吸を整え、四肢に力を込めて立ち上がる。リンクが憔悴している間にも敵襲をかけなかったのは、それだけ奴等が油断しているということだ。

嗚呼、そうだろうな。

どうせ子どもの成りをした、まだ親離れも果たしていない立派な餓鬼畜生だ。

まだ正式な入団式も行っていないし、勲章すら与えられていない。

王や姫君なんて謁見も叶わず、陳腐に描かれた御伽草子の中でしか見たことがないのだ。

自分のような若輩者が高貴なる聖騎士の下方に名を連ねることですら、なんとも甚だしい話だ。十三の幼子が戦場に向かうなど、誰が聞いても馬鹿げていると笑うだろう。

全ては、この忌々しき弓手の烙印によって生まれる前より定められた宿命であった。この烙印さえ無ければ、自分も今頃親の背につき働いていたかもしれないだろうに。

誰も、同情などしてくれない。

理解者など居ない。

他者とは違うという劣等感が常に付き纏い、時にはこのまま消えてしまいたいとすら思った。

相談相手も居ない。

偽善者ばかりが追って来る。

そんな自分は、遂には人外異形にまで嗤われてしまうようになってしまったのか。

ふと、前日のやり取りが脳裏を過ぎった。

お前の實力を見せ付けてやるのだぞ

抜かりなくやれ。そう告げた父の手は、昔と変わらない温かさを持っていた。

物心ついてから、それまでは心の芯まで凍ってしまっているのではと疑っていたのだが、母がいう通りまだ人らしい体温は保っていたのだ。

遠征に行くのは今回が初めてではないというのに。まるでもう会えないからと嘆くように、両親は扉の奥で手を振っていた。

リンクは動く肩で柄を握ると、ゆっくりと剣を引き抜いた。抜き身の刃が淡い日光を弾いて鈍い輝きを放つ。

途端に、化け物共の間にごよめきが走った。戦意を失ったかに見える少年の瞳が、美しくも苛烈に燃え上がっていたから。

舌が乾いた唇を舐めた。

「成果を残さなくちゃいけないんだよ」

無感動な言葉が空気を震わす。

「僕も、早く認めてもらわなくちゃ。聖騎士の隊列に加われば、きつと皆、僕を解ってくれる」

神から下された力量ではない。自分が努力から得た才能だと、大

衆に認めて欲しかった。

忌々しい烙印を消し去るために。

瞬間、上方からけたたましい鳴号が轟いた。

「っ、！」

リンクの瞳が正常に戻る。

意識が高揚していたようだ。なにか善からぬ思案を呟いていたのかもしれない。

弾かれたようにして頭上を振り仰ぐと、蒼穹が抜けてそのまま墜落してきたかの如く、彼が居た場所に沼蛙が追突した。

重低音が足を這い登り、舞い上がった埃が視界を曇らせる。血走った双眸がリンクの姿をがっちりと捉えた。

再び咆哮。

堰を切ったように、それまで隠れていた同朋が一斉に伸び上がり、鳴き袋を膨らませる。

リンクは剣を握る手に力を込めた。

周りよりも一回り巨大な沼蛙が大きな弧を描き、樹海の中を旋回した。同朋が次々とその後を追う。

木々の間を縫うように泳ぎ陣を整えたと思いきや、一気にリンクとの距離を詰めた。

めりめりと化け物の口角が眼の下まで裂け、涎にまみれた犬歯が外気に曝される。

一塊に纏まった陣はやがて砲弾を想わせる速度でリンクに襲いかかった。構えた剣を守勢に持ち直し、真っ向から弾き返す。

「ハアッ！」

裂帛と共に払った剣先に七色の火花が踊った。透き通った金属音が森中に反響し、滞っていた陰の気を風に散らす。

分が悪いと感じ取ったのか、砲弾はぐつと体勢を変えると、悲鳴にも似た甲高い声を放った。

リンクは足許に揺れる水面が三度泡立っていることに気付いた。彼がその場から蜻蛉を返すした瞬間と、湖の中央から飛沫を巻き上げながら次の敵陣が飛び出したのは、ほぼ同時である。

頭上より降り注ぐと飛び上がった沼蛙を、リンクは弓手を翻し次々と閃かせては骸へと帰していく。

最後の一匹を烈々と両断すると、彼は化け物の血液で汚れた刃を正眼へ据えた。

「暗影を闊歩する魑魅魍魎共よ、貴様等が喰い殺した彼の怨嗟を断ち切るため、今ここに、鎮静の礎となることを命じよう」

玲瓏とした言霊が通力を宿して、密林の中空に波動の波を生み出した。

通力を受け、剣先に縫い止められた生き残りの沼蛙達が憤怒に哮り狂っている。

案の定、同朋が目の前で殺されたことに憤りを感じているのだろう。思考力を完全に失い、チームワークが目に見えて崩れてきている。

鋭利な牙をガチガチと鳴らしては、仕切りに肢体を揺らして呪縛から逃れようと躍起を起こしていた。

振り上げた白刃に清冽な霊気が寄り集まって行く。鈍い光りが放たれたと思いきや、それは瞬く間に沼蛙の陣を一刀両断に伐つていった。

切り裂かれていない者も、共に駆け抜けた霊気を浴びて苦しげに

呻いている。一拍置いて眩い閃光が爆発し、不浄なる異形共を一切の気配のもと、大気に霧散させたのであった。

完全に気が消えたことを確認したリンクは、ふうと表情を緩め、玉汗を拭った。

「ストレス発散はいいけど、さすがにキツいんだよねえ。気を操作したりとか凄い体力使うし」

まあ、これでの行商人の無念も晴れたことだし、安心して旅立って逝けるだろう。

未だ靈気の残滓が立ち上る剣を静かに鞘へ納める。力の脈動は漸うに薄れ消えた。

「あ、そだ」

リンクは湖の裏手に周り、先程投げつけた短刀を木から抜き取った。己の持ち物は大事にしろ、という父の受け売りである。

そのときズキリとした痛みを肩に感じ、そこで初めて自分が怪我をしていたことを思い出した。

応急用の薬品は所持しているものの、本格的な解毒は仮屋にでも帰らない限り無理なようだ。

止血をしようにも包帯はなく、あっても弓手のそれだけは決して取りたくない。

「……仕方ない」

さすがの母でも、これぐらいなら許してくれるだろう。

衣の一部を引き裂いてガーゼ代わりにしようと試みた彼は、そのとき自らの出で立ちを見下ろして、
絶句した。

01：霧滴に侵された森*2（後書き）

戦闘シーンを書くのは好きなようで苦手です；

キャラに武器を持たせたり、斬らせたり、怪我を負わせるのは好物なんですけど（殴）、それを文章で表現するのはまだ慣れていないですよ；；

それこそ才能の問題なのでしょうけど……。

そこで手を退いてしまったらお終いなのでw自分、諦めの悪さはにだけは自身があるのでwww

トドメを射す時の謳い文句のような台詞は、完璧きょう助の趣味ですw

ゼル伝風にするにはどう言わせようか迷ったのですが、元々リンク事態が本編では無口なものなんで；

……あれは無口キャラなんですよね……？ そうなんですよね？

02：哀しい英雄*1

密林での騒動より翌日。

立ち並ぶ木々の足元を通り過ぎて行きながら、リンクは世話しく渴いた喘鳴を繰り返していた。

灯りは持たず、弓手に短い剣を握り締め、腰からはベルト式の鞆が力無くぶら下がっている。何が起きても素早く対処できるよう構えているのはいいものの、既に丸一日掛けて歩き通しの彼の体力は、心身ともに限界近くまで達していた。

力の入らない四肢に、睡魔が思考を鈍らせる。時折、繾れそうになる足を叱咤しつつ、木の根に躓き^{まろ}転びそうになりながらも、その眼前を見据える蒼穹のような双眸から光りが潰^{つい}えることはなかった。

久方振りに拝めた空は、もう暮色に染まりかかっている。

網膜を焼くような陽光に目を凝らしていると、リンクは至極身近に人の気配があることに気付いた。

沈みかかる太陽を背にした黒影。千両箱が横たわったようなそれを目にした瞬間、彼の左脳に理性が蘇った。

飯屋のある村までは、馬を走らせても最低一刻（約二時間）は掛かるだろうと聞かされていた。

無論、往きは仲の良い奉公人の善意に甘え馬を走らせて来たのだが、帰りがこும்遅くなり、そもそも迎えを呼ぶ連絡手段も無いではないかと森の中で気付いたこともあって、帰路は仕方なく歩いて行こうと嘆いていたところだ。

自分の失態ながら情けない。馬でも一刻の道のりを、人間の足で歩んだら一体何刻掛かるのだろうと先程までげんなりと肩を落とす

ていた。

が、これは正に奇跡だ。

黒影の輪郭が荷車のそれとはつきり認識したとき、憶測は確かなものになる。

唐突な出来事に感激しつつ近付いたリンクは、荷車の座席で眠り呆ける瘦躯の男をつついた。

「あ？ あん、なんだ、東宮様じゃあないですか」

ハンチングの下から現れた寝ぼけ眼にリンクはにこりと笑いかけた。見慣れた面持ちに安心したのか、それまで身体に掛かっていた緊張が一気に霧散する。

日に焼けてはいるものの病人さながらの灰色の肌が、今だけは夕焼けを帯びて健康的な赤褐色に染まっている。

蒸し熱かったのか、だらしなく開けた胸元には決してお世辞には良いといえない筋肉が申し分なくついていた。

「東宮は辞めてくださいよ、スタニスさん。リンクで結構です」

リンクが微笑すると、スタニスと呼ばれた男は項の辺りをぼりぼりと掻き、未だ瞳を完全に開かせないまま面倒そうに起き上がった。

「そりゃあいいや。その方が俺も呼びやすい。んじゃあリンクの坊ちゃんよ、ぼうと突っ立ってねえでさっさと荷台に乗ってくださいね。……そんな服じゃあ、到底無傷だなんて言い切れんからな」

半眼だが容赦のない視線が、主の纏う惨憺とした緑衣を見据える。リンクは観念したように肩を竦めると、大人しく後ろの荷台へ乗ることにした。これと違って大掛かりな荷駄を積んでいるわけでは

ないので、妙に広々と感じて僅かながら優越感を覚える。

なあ、と声を掛け、スタニスが苦笑気味の視線を投じてきた。

「突拍子も糞もない藪から棒の命令を文句一つなく遂行して戴き誠に苦勞様と言いたいのですがね、その恰好はさすがに目に余りますよ、東宮様」

「……そうですか？ 結構気に入っているのですけど。ほら、この袖のびらびらとか」

同じような渋面が、視るも無惨な衣を振って見せるリンクの顔からも滲んだ。

一瞬で本意ではないとわかった奉公人は困った様に肩を上下させる。

鞭を打つ音が響き渡ると、荷車は村に向けて平原を闊歩し始めた。

荷台の端に肘を据え、暮れ行く日を茫然と眺める。朝花月夕の言葉があるように、長月上旬の入相いりあひは目を見張るほど美しかった。

異邦の国々では春夏秋冬なる季節があり、それに準じて大気の温度差や朝夕の流れ方に変化がみられるというが、我が国では月が変ハイラルわってもこれといって自然の変調はみられない。

代わりに南にいくほど亜熱帯さながらの暑さに、北上すればその分気温が下がっていくというなんとも単調な特色があった。

次いで東には常に噴火を繰り返す活火山が暴れ、西には水性の陰族や亜人が牛耳る巨大な河川が流れていたり、一足伸ばせばいつでも冒険気分になれる地点がそれこそ星の数ほど点在おり、観光客はおろか国民でも過ごしていて飽きないこともこの国のひとつの長

所でもあった。

が、その長所を短所と思う人種も中には居るものだ。

否、そう思う人種こそハイラルの半分を占めているのであって、季節に構わず襲撃をかけてくる陰族を見てみぬふりをして、やれ觀光だの旅行だのを抜かす樂觀主義者こそ、この国における気狂いなのである。

そう唱えたのは他でもない、偉大なる彼の父親だった。

「悲観こそハイラルの美德、つてね。何処の物語の主人公でもあるまいし、そんな根暗な人生は送りたくないなあ」

溜め息混じりの独り言は、とろけるような夕暮れにじんわりと溶け消えていく。

それに気付いたのか、スタニスが出し抜けに口を開いた。

「なにを唐突に仰るかと思えば。……仕方がないですよ。皆が皆悲観論を謳歌するなら、俺ら一般人かつ権力も持たない従人はそれに便乗するしか術は無いのですから」

「ふうん……。……気に食わないなあ」

リンクは目掛けの奉公人が自身と同じように辟易していることを知り、不満げに鼻を鳴らした。

メランコリスト（鬱病）が蔓延したこの世界に、未だ更正の可能性を抱く自分はやはり異色な人間なのだろう。

スタニスの示す通り、権力はおるか発言権も持ち得ない従人は有力者の考えに縋るしかない。目立った行動を起こそうものなら、罰せられるとまではいかないが、まず世間からの目が冷たくなるのは必定だ。

王都はその傾向が特に際立つ。

住人の殆どが貴族ということもあって、階級意識が激しいハイラルでは貴族と一般人が仲良く並んで歩くなどの行為はまず見られない。ちよつとしたいざこざでもすぐに尾鰭背鰭ちまたがついて巷を泳ぎ出すし、有力者が一般人を蔑む口述は聞くに耐えないものばかりだ。

そんな不浄の巢窟に早速近日の内に近況報告をしに赴かねばならないと考えると、必然的に彼も“メランコリンク”になってしまう。王都の賑やかな活気に憧れを抱くスタニスは、それでも行く資格がある分マシじゃあないかと口を尖らせたが、リンクは茹っだるように否定した。

「マシなんかじゃないですよ。人の大勢集まる街道なんか、歩くだけで体力が削られるんですって。スタニスさんは行かないほうが良いですよ。夢、壊されたくないでしょう？」

「どうだかな。母ちゃんの懐に守られた乳飲み子じゃああるまいし。だが坊ちゃんが忠告してくださるってえなら従いましょうかね」

悪戯つぼく笑う横顔。スタニスのこうした性情が気に入っているのだが。

対するリンクは苦虫を奥歯で噛み締めた時さながらの渋面をつくった。

「ああ、行きたくない。それこそ人間性が失われちゃいそうなところですよ。腐っちゃいますって。だから都から毎日のように廃人が溢れ出てるんです。……スタニスさん、いつそ僕と」

奉公人は至極真面目に遮った。

「入れ替われと仰りたいんでしょう？ 秘術師でもない限り、現実的に考えても無理難題ですよ」

「……やっぱり？」

「無茶です」

リンクはムツと眉根を寄せると、荷台からスタニスの座る席に上半身を投げ出した。

「ほんと、あそこは地獄なんですって」

「その地獄に行かない方が良いといっておきながら、入れ替わらないかと仰せになりますか。最近の東宮様は質たちが悪いのですねえ」

だって、と口頭するも、リンクは二の句も告げず渋々口を嚙むことにする。

あのような貪欲の叢雲など、召集が言い渡されなければ絶対行きたくない。我先にと軒を連ねた商人は貧しい民衆から金品を絞り取り、利益の半分の納税を貴族らが身分を見せしめるため贅沢三昧に使いまくる。

上は上で世継ぎ争いや階級闘争が息をつく隙さえないほど繰り返され、下は下の事情から窃盗や詐欺が後を絶たない。それを取り締まるべき衛兵も衛兵で、結局事件は堂々巡りとなってしまう。

国の顔がこんなに荒れていて良いものなのだろうか。表向きが華やかな場所に限って、裏は黒々としたものが渦を巻いているものだ。

「国王様はなにをやっているのかな。最近は体調が優れないって聞いているけど、政まつらぐらいはしてもらいたいものだよ。このままいけば、遅かれ早かれハイラルは没落するだろうなあ」

「坊ちゃんの都会嫌いは相当な重症と見たな。しかし幾ら由々しき事態といえど、我が国の救世主ともあるうお人が、そのような妄言を吐いてはなりませんぞ」

穏やかだが厳しい口調。スタニスは手綱を操りながらリンクを諫めた。

「救世主様はハイラルの光なのですから。浮世を混沌より救い上げ安寧へ導くのがお役目なれば、それ相応の言動が必要になってくる」

むっつりと黙認していたリンクの弓手を、スタニスが藪から棒に掴み上げた。

「はあ、こんなぼろ切れを巻き付けて。それほど聖三角の印を曝すのがお嫌いなのですかい？」

不愉快に口を歪めたリンクは、握られたその手をぞんざいに振り解く。

「また……、スタニスさんまで父様みたいな夢を並べるんですか」

「夢想じゃあない。俺はそう踏んでいるだけです」

聖なる刻印を携える者は、救世主として浮世を護る宿命をもつ。

それは代々勇者の家系に伝えられる伝説で、その末裔であるリンクも当然のことながら熟知していた。

あるときは枕言葉に、あるときは親族の謳い文句で。子守歌代わりに聞かされてきた祖先の武勇伝は、忘れようにも忘れられないほど脳裏に焼き付いている。

それでも彼は、自分がその祖先と同等の印を有していることが許せなかった。

「皆吉事の極印だつて口を揃えますけど、僕にとっては、呪われた烙印以外のなものにも思えないんです」

最初から定められた運命。この印が現世に現れたということは、偏に世の混沌を知らせる前兆でしかない。

邪悪な存在を打ち倒す。そんな常識では考えられないような大業が、避けられぬ宿命としてこの先の人生に用意されているのだ。

「これのせいで何度命を狙われたか判りません。反政府側からすれば畏怖の対象ですからね。例えば包帯を巻いて隠しても、無駄だとわかってるんですけど」

護身用の体術も習得し、脇には常に武器を佩いている。しかし害を為そうと迫ってくる異端者の存在を間近に感じたとき、彼の心は酷く切り裂かれた。

幼い頃は、この呪われた烙印を拭い落とそうと躍起になっていたのを覚えている。しかし幾ら流水で洗っても刻まれたものが消えるはずもなく、赤く腫れ上がった弓手を見て、取り留めもなく哀しくなったものだ。

「できるなら、誰かに譲ってあげたいものです。こんな印、僕には必要無い」

「そう安易に言うもんじゃあ有りやせんよ。とろつと思つてとれる代物でもありません。坊ちゃんにそれが宿ったのには、それ相応の理由があつてさ」

穏やかに宥めるスタニスの声に、返答はない。ぐつとなにかを堪えるように唇を噛み、粗末に定めた運命の主に、例えようのない怒りをぶつけているのだらう。

スタニスにはその気持ちかわからない。直英雄と持て囃され、ときに絢爛豪華な宴に招かれる彼を羨むときもある。貧乏かつ従人の自分には決して食いつけないような幸福の、一体なにが不満なのか。苦惱など、その人自身にしか到底理解できないことは、さすがのスタニスも承知していた。故に、自身が奉公人として彼を支えるにはどうすべきかも。

スタニスは徐に片手を上げた。リンクの髪を帽子越しに軽く撫で、それから頭を愛おしげにぽくぽくと叩いた。

「坊ちゃんも坊ちゃんだ。例え用意されたレールに従わなければならなかったとしても、それを決めるのは自分だ。反抗なんて、幾らでもできる」

穏やかに言い含める。

邪気を知らない無垢な瞳が、大きく開かれた。年相応に反論しようとして口頭するも、言葉に詰まった少年は、少し間をおいてからコクリと頷いた。

「……すみません」

叱られた童子のように、肩を落としてしゅんとするリンク。

そうだ、まだ先日十三を迎えたばかりの童子だったのではないか。あまりに大人びた価値観や物言いをするため、ときにその事実を忘れてしまう。

宿命を背負うにはまだ幼すぎる。それを隠すかのように、彼は常に静謐とした態度を上辺に貼り付けているのだらう。

本来なら、同志の童子達と共に野を駆け川を下り、存分に遊び呆ける時期だろうに。

頭を頂垂こぶへれたまますごすご荷台の隅へ戻っていくリンクを目の端に捉え、スタニスは、はあやれやれと息をつくのだった。

02：哀しい英雄*1（後書き）

今までとは違う人間&都会嫌いのリンク。

彼を書くのはいつだって飽きませんw w

少年ながらに大人びたところや、自身の弓手にある印を隠そうとする。

それでいて我儘な性情も、全てが全て俺得によるものだったりしますw w

リンクを13歳に設定したのに、これといって深い意味はありませんw w

トゥーンが12頃、時オカの子リンクが10歳だということを踏まえて、

そのすこゝしだけ上がいいなと思った結果、こうなっておりますた：*：*：*（）*：*：*：

13歳っていいですよ

可愛い少年=10~14というのがきょう助の理論ですw w w w

以後雑談。

スタニスの空想中の元画が『二〇国』のジャイ〇さんだったり（、）

貧相かつ優男っていいですよw w

02：哀しい英雄*2

リンクはものも言わずに肘を荷台の囲いに据え、暮れ行く入相を眺めていた。

時折、奉公人の様子を窺うようにその背に視線を向けるも、無言の空気に後ろめたさを感じ、数秒と経たない内に顔を戻す。そんなことが、片手の指では数え切れないほど続いていた。

訓辞を教えられたのは、これで何度目か。自分がぼつぼつと口にする失言を誰も彼もが戒める。

軽はずみに喋れたものではない。殊に、強情な父の前では。

そんな父の受け売りか、最近ではスタニスまで口を揃える始末だ。数ある丁稚奉公のなかでも唯一の目掛けだったこともあり、リンクとしては度々複雑な心境になる。父から言い聞かせられる分には慣れているが、スタニスという飄逸とした人間は、まるで霧のように捉えどころが無く、故にその言い草も逃れようがない。

リンクは思慮深げな顔をした。やはり、自分は英雄としての自覚に至極欠けているのだろうか。

ふと、瞼がずっしりと重みを増した。

長く堪えていた眠気が堤が崩壊するように溢れ雪崩れ込んで来る。抑え切れない睡魔は欠伸となって中空に放たれた。

「ふゆあああ……」

発せられた声は自分でも情けないと思うほど間延びする。

未開の地を徹夜で往復したに加え、最奥では人外の軍勢と大暴れ。さすがに限界だ。……いや、限界という域ももう超えてしまっているのでは。安心したこともあり、瞼が重くて仕方がない。

それまで沈黙していたスタニスが、ククツと笑声を漏らした。

「眠いのでしょうか？ だったら横になつてればいいものを。村までまだ時間がかかることぐらい解っているくせに」

あふあふと寝ぼけ眼を擦る自分を面白そうに見やる顔色が意外にも柔らかいことに気付き、リンクは内心でほっと息をついた。

そして、刃物に裂かれた肩の部分と、その下にある布切れで覆われた傷口を示す。

「多少ですが、毒気に曝してしまいました。意識を手放してしまつては危険かと思ひまして」

眠りに落ちて、そのまま永遠に目覚めませんでした、なんてことは願ひ下げだ。だが、膨れ上がる睡魔は収まる術を知らない。そこで彼がとつた行動は、自ら傷口に刺激を与え、自身を眠らせないようにつること。

今では痛みどころか、麻痺してその部分だけ感覚がないが。

それでもまあ、先の今までは睡魔を抑えられていたわけなのだけだ。

リンクの弁舌に耳を傾けていたスタニスは、呆れてものも言えないような表情を投じた。

「さすが坊ちゃんだ、と言いたいがな、それはちと難しい。解毒はしたので？」

「一応。ですけど、完全に毒気を抜かない以上、安心は出来ません」
リンクが悄然と嘆息する。その様子を楽しむように、スタニスは
口角をニマリと歪ませた。

「なら問題ない。眠りなされ」
「へ？」

リンクは虚を突かれたように目を瞪る。

「寝る子は育つもんだぞ、坊ちゃん。ほら、つべこべ言わず横にな
つてろ。大丈夫、坊ちゃんを死の淵に立たすような愚答じゃあ決し
てありませんから」

「え、いや、スタニス、さん……！？ わあッ」

困惑するリンクをよそに、スタニスは手綱を放して荷台に進入し
てくると、一応仕えている主を躊躇することなく押し倒した。

木造の底に背を強か打ち付ける。痛い表情で訴えるも、眼前に
迫った灰色の顔に反省のいろはなかった。

「ほら、年配者の言うことは聞くもんですぜ」

文句としては上出来だが、悪事を企む餓鬼のような笑みと言いつ
には到底従えないなにかが含まれている。

「だ、だから、なんッ」

幾度か解放を求めてバタバタと手足を振り回したが、修行を重ね

ているといつても数十も年嵩の成人に適うはずもなく。

観念して溜め息を吐き出すと、悪童は妥協した主を見下ろして満足げに笑った。

「無駄な抵抗は正に無駄だぞ、東宮様」

「わかりましたよ。寝りゃあ良いんでしょ、寝りゃあ」

多少懸念が残るが、この奉公人が自身の吐いた台詞に背くような人柄でないことを信じることにし、リンクは渋々といった態で鉛のような臉を下ろした。

しかし幾ら睡魔に襲われているといつても、ひとけ人氣が近辺に、しかも目と目の距離が一尺（約三十センチ）より短いそれで、どう眠れというのか。

が、ここで開口するとまた面倒な訓示が延々と始まることになる。半分寝るといふ器用なことは得意ではないが、彼の監視が終わるまでは辛抱するしかない。

そうすることでどれほどの時が流れただろう。実際ではあまり経っていないくとも、瞑目したリンクには既に何刻も過ぎたかのような錯覚に陥っていた。

いつの間にか、彼の気配は遠退いていた。恐らく、再び手綱を引いて村への帰路を見守ることにしたようだ。

が、監視下から外れたにも拘わらず、リンクの双眸が開かれることはなく。

無意識の内に、朦朧とした意識は闇の奥底へと落ちていった。

最後にうつすらと見えた薔薇色の黒雲が、夜の到来を告げている。

夜が来る。

昔からそれだけが怖くて。

夜になると、奴らが来た。

闇のなかで蠢く、様々なモノ達が。

幼い自分は、本能的にそれらが人外のおぞましいモノだとわかっていた。

ソレは常のように纏わり付く。

殊に、夜は。

陽の気が薄れ、暗黒の住人達が地を這い跋扈するその間は。

衣に包まってきつく目を瞑っても、唇を噛み息を殺しても、おぞ

ましいソレ等はリンクを捜し出して取り囲む。

災イダ

禍イダ

やめて。やめてよ。

災イヲ呼び込ム、呪イノ御子

聖三角八崩落ノ証

やめて。ききたくない。

才前八全テノ災厄トナル……！

どんなに耳を塞いでも、どんなに運命を拒んでも、異形の誘惑は頭の奥へ滑り込んで来る。

いやだ。やめて。

たすけて、たすけてよ。

どうしてこんなコエがきこえるの。

どうしてこんなモノがあつまるの。

どうして、どうして。

いやだ。いらぬ。

こんな力……、こんな命、いらぬ。

聞こえても、集まっても、なにも出来ない。

ソレ等が自分になにを望んでいるかはわかってる。

死、だ。

災厄の終焉。

しかし、ソレ等を追い払う力も勇気もない自分が、自らの命を絶つなど絶対に出来やしなかった。

必死に身を硬くして、迫る甚大な殺気を堪えていた幼子は、苦しいほどの圧迫感が増したことを感じた。

なにかが、自分の唯一の防塞である衣を引き剥がそうと、魔手を掛ける。

ああ、もうだめだ。

観念しかけた、その刹那。

「リンク　　ッ！」

怒号が轟き、幼子を取り巻いていたおぞましい気配が瞬時にして掻き消えた。

もとの、深夜の静寂が戻ってくる。

全身から冷たい汗が噴き出した。張りつめていた空気が流れ出し、呼吸が楽になる。

しかし、萎縮してしまった身体に力は入らず、ただ我知らず小刻みに震えていた。

恐怖で未だ動けずにいるリンクを、彼は安心させるように抱き締める。

嗅ぎ慣れた森の匂い。そして、自身を見詰める見知った瞳は、蒼穹のように澄み渡っている。

喉の奥で滞っていた呼気が、堪えきれぬ泣き声と共に溢れ出た。緩んだ涙腺からは止め処なく涙が零れる。

こわかった、こわかった、と泣きじゃくるリンクを、彼は落ち着かせるように優しく抱いた。

「大丈夫。もう大丈夫だ」

リンクは幾度も深呼吸をして気持ちを落ち着かせると、あまり変わらない位地にある穏やかな瞳を見詰めた。

目の端から余韻を残すようにほろほろと涙が伝う。

瞳が笑い、涙を拭った。

焼け付く喉に力を込めて、なんとか礼を口にしようとする。しかし、結果的に発せられたのは酷く掠れた、弱々しい声だった。

愛おしい、彼の名を。

「ありがとう。」……「

彼は、再び笑った。

その名が言葉をもつ日は、もう二度と、無い。

02：哀しい英雄*2（後書き）

前回の最後辺りにいろいろ妄想爆破しましたww

ども。妄想ハゲこと夜摩祈です。

この度も此のような駄文駄作を最後までお読み戴き、
至極恐悦に存じます。

やっときさ三話に突入したのですが、

書いていてよく思うことをここで暴露。

『あれ……これって、マジで……、完全オリジナルだよな……？』
二次創作の域を超えてしまいそうで；

上記にもありました通り、やはり自分は相当な妄想ハゲのようd
ry

常のゼル伝にはあまり見当たらないようなテーマを設定したのです
が、

なんとなくお分かり戴きましたでしょうか……？

こういったテーマは初めてなので徐々に陳腐な内容になりそうで（怯
神聖なるゼル伝を汚さぬよう気をつけている所存です；；；

個人的にスタニスが気にっております。

喰っても喰いきれない奉公人的なw（なんとという俺得www）

正義の欠片もないような勇者様を書くのも大好きですwwbb
このような俺得キャラが今後もどんどん増えていく予定です。

いつかはアットホームな座談会を開けたらなあ……つと^^；

では、また次回にまたノシ

03：奉公人は愉快に諭す*1

「……………」

ゆるゆると瞼を押し上げ、仄かな明かりにぼくと照らされた、薄暗い天井を見上げる。

夢をみていた。ひどく、懐かしい夢。

幾度か目を瞬き、周囲を一瞥する。

人の気配はない。

肘を支えにそつと上体を起こす。一瞬眩暈が生じたが、それも目を閉じてやり過ごした。

一度手のひらで目許を多い、盛大に息を吐き出す。

現在の状況確認。ここはどう見ても自分の自室であり寝具のうえ、布団代わりの衣から現れた上半身は一糸纏わぬ出で立ちだ。

普通ならそこで淫靡な妄想が膨らむところだが、肩に巻かれた包帯と、夕べまでの己の行動を思い返して、それはまず有り得ないだろうと結論づけた。

ま、十三の自分に快樂を求めてしまうほど、あの奉公人は落ちぶれてはいないだろう。

苦々しく笑い、リンクは塞がりつつある傷口とその上を覆う白布に触れた。

「それにしても、なあ」

さすがスタニスだ。包帯の巻き方ひとつ丁寧仕上げてはいない。取り敢えず解毒して巻いてみましたと言わんばかりの粗末な一品は、彼の性情を純粹に表しているようだ。

ついでに首をまわして、身体のおちこちを確認する。知らず知らずの内につけてしまったらしき傷は既に処置されており、意外な面で丁寧なんだよな、とリンクはなんともいえない笑みを浮かべた。身に着けているのは泥だかなんだかで斑になってしまったズボンと、その下着。上半は包帯だけを粗末に巻かれ、着ていたはずの上着や衣も、ぐしゃぐしゃになって隅に置いてある。申し訳程度にかけられていた厚手の衣は、おそらく戸が開け放たれたままの箆たんすから適当に引つ張り出してきたものだろう。

帽子を脱いだ髪はほこりっぽく、よく見れば毛先に土塊が固まっている。

などなどという事もあり、これでは安眠も出来たものではないと顔を顰めたりリンクは、取り敢えず二度寝よりも寝具から抜け出して身体を清めることを優先した。

壁に何故か立てかけてあった松葉杖を支えにゆっくりと直立する。途端、休養していた筋肉が次々と悲鳴をあげ、リンクは危うく叫びそうになった。

それでも歯を食い縛って苦痛を受け流し、重い身体を引き摺るようにして、飯屋の裏に廻った。

王都のような万能機器も無いため、湯を沸かすにも河川の水を汲み火を起こすなどという面倒な一仕事をしなければならぬ。

節々がギシギシと痛むこの状態でそれは難を有するだろうと悲観に暮れていた結果、それは無駄な気兼ねとなった。

幾分か冷めてはいるが、まあまあ温かいぬるま湯がひっそりと湯

気をたて待ち構えていたのだ。

呆気にとられたリンクの脳裏に浮かんだのは、あの飄々とした瘦躯の家僕。

力仕事は嫌いだと以前から肩を竦めていたが、今回ばかりは主人が酷だろつと気を利かせてくれたのかもしれない。

「うう、スタニスさん……恩に着ます」

健気な奉仕にぐすつと涙ぐみ、深夜の身を切るような室温に晒されぬようさつさと衣服を取り去ったリンクは、すぐさま細い絹のような湯気が立ち上る湯船の中に身を潜り込ませた。

湯に入り、清潔な寝衣に着替えた彼は、つい先刻までの薄汚い少年とはまるで別人のように見えた。

泥と不純物とがごびり付き斑模様を描いていた肌は張りのある瑞々しい色彩を取り戻し、絡み合っごわごわと強張ってしまった髪は、根気よく濯いだことにより、さながら細く伸ばした金のような艶を放っている。

湯上がりの爽快感に満悦してわしわしと髪を拭いていたリンクは、位地の低い窓辺に立ち、暁に染まる村々を眺めた。

身体を拭ったせいもあり、脳は既に覚醒している。それに今更床についても、満足に寝られないことはわかっていた。

昼になれば、さすがの村人達も家々から現れ畑仕事に精を出し始める。そのなかでひとりいびきをかきながら横になっているのも人間として咎めるべき愚行だろう。

が、覚醒しているといつても身体的な体力は完全に回復してはいないため、軋む節々が悲鳴を上げていることも現状だ。

召集の日が近日中でなければ、こんな思案に暮れることもなかったのに。

湯上がりの際にふとポストの存在が気に掛かってなかを確認し、案の定そこに投函されていた文書が城からの通達だと一目で理解した瞬間、リンクは肩に疲労という岩がのしつと乗りかかって来たように感じた。

ああ、ついに来てしまった。

ついに召されてしまった。

恐らく、近況報告だけでは済まないだろう。十三を過ぎても未だ独り立ちの儀を行っていない自分のために、聖騎士団直々の儀式を執り行おうというのだ。

通常、人民の子弟は十一から十五の間に公事を済ませてしまう。後々の出世にも関係してくるので、大概は十一になったらすぐに独立と就職方針を宣告し、王より正式な任命章を賜って出仕、となる。リンクのように、二年も過ぎて未だ未報告というほうが少ないわけだ。

儀式の多くは月の始めに行われる。村の子どもとあまり交流をもたないため詳しくは定かではないが、顔馴染みの子がひとり、先月に章を賜ったばかりで、ついこの間、王都に出仕していた。

「都としては、ひとりでも多く人材が欲しいんだろうけどね。でも最近じゃあ碌な仕事がないみたいだし。医者を継ぎたいって言うってたやつが、貸金の取り立てになっただくらいだからなあ」

そう考えると就くべき職が定まっている自分は幸せ者なのだと感じたくもなるが、結局のところ強制されているせいかな、有り難みのひとつも感じない。

年頃の男子は皆、口を揃えて聖騎士になりたいとせがむのだそうだ。

戦地に赴き雄々しく剣を奮う様に大抵の子ども達は感化してしまうのだが、自分は非力な幼少期から武器を握らされていたために、そういった感情が一切芽生えない。

子どもが幾ら感化され武術に励もうとも、庶民風情の餓鬼が王都の軍勢に加わることは有り得ないとされる。全ては、家柄や地位の問題なのだとか。

大国ハイラルの端、ここ辺境の村も、そういった子ども達が夢物語を賛美する傾向が見られる。そうして純粹無垢な夢は永久に破棄され、彼等は自分の身分を改めて痛切に思い知らされるのだ。

「……だから王都は嫌いなんだ」

吹き溜まりの都。全ての元凶の根源かつ、汚れた国の顔。

リンクがそれを極度に嫌悪し、世間には都会嫌いとも称された理由は、ただ偏に柄の悪さを評してからのものではない。

あの都には、唯ならぬなにかを感じる。

小さく幼い頃から、彼はそう思えてならなかった。

人々の負を煽るなにかが。

それが、いずれ世界を脅かす巨悪の存在だと知っていて。

「一刻も早くアレをなんとかしなくちゃ。僕は王様を動かすほど権限はもってないけど、父様ならなんとか出来ないかな。一大将なんだし。ああでも、なんて説明しようかな……。まさか城の内部にアレが居るなんて到底言えないし、第一そう言っただけで父様が動いたとしても、これがそうだってはつきり判らないし　だああ、もう！」

だから王都は嫌いなんだ、と半ば八つ当たり気味にリンクは吐き

捨てた。

つまり纏めると、根源であるアレの気配らしきものは血筋の因果からかぼんやり掴めるものの、あまりに存在が漠然としすぎていて他に例えようもなく、本人の嘆く通りこれだと断言できない代物なのだ。

生きているのか、物なのか。固形物なのか、霧状の粒子なのか。触れるのか、はたまた目に見えるのか。それさえ判らない未知の異物をなにも知らない人間にどう説明すれば良いというのだろう。

タオルを適当に放り出し、脱力した身体でごろりと寝台の上に寝転がる。スプリングが軋んだ音をたて文句を叫んだ。

あれは脅威だ。闇の深淵で蜷局を巻きながら、今この瞬間も、来たるべき時に備え鋭利な刃を研いでいるのだろう。

故に早く対処しなければならぬことを余所に、リンクは今日この日まで いや恐らく明日も、父はおるか他人に口頭することなく過ごしてきた。

唯一話を最後まで聞いてくれたスタニスでさえ、腑に落ちないような顔をしていたのだ。

対象がどういふものか判らなければ、例え話しても対応のしようがない。なら相手がどう出るか、東宮様が常に目を光らせていた方が、賢明だろうなあ。

スタニスはそれだけを助言してきた。

あの、実は見た目とは裏腹に至極聡明で機転の利くスタニスでさえ辟易しているのだから、未熟な自分がどう努めても結局のところ苦労は水の泡に帰すのが必然なのだろう。

だが、黙って見ているわけにもいかない。

「さて、どうしようかな。後々どうして教えなかったなんなのって

濡れ衣着るのも御免だし」

枕に顔を埋め、小さな救世主は盛大な溜め息をついた。

「溜め息を吐く吐かないは自由だが、あまりやるものでもないですぞ」

こつこつと気怠げな足音が床を鳴らし、痩せ細った長身の影が彼の後ろに姿を現す。一見すると地に突き刺さった棒切れのように見えなくもない輪郭ではあったが、影は間違いない無く人の姿をしていた。辺境と呼ばれるこの村に相応しい継ぎ接ぎだらけの襦袢じゆばんをこれまただらしなく着こなし、さながら鳥の巣を想わせる頭髪はここ数日手を付けていないことが歴然として見てとれる。

端からすれば浮浪者相応の容姿故に、眉目秀麗なリンクの近隣に居るだけで酷く不吊り合いな空気を生み出す。

が、顔だけを枕からずらし視線を投じたリンクは、忌むような所作など微塵も見せず、寧ろ村のなかで唯一信頼を置き、輪を掛けて敬愛する下男の登場に、心做か嬉々としているように見えた。

少し雲を宿した蒼穹の瞳が戸口に佇む瘦躯を捉えたまま、スツと細められる。

「スタニス……さん」

「ずいぶん塞ぎ込んでるなあ。東宮様はまだお若いんですから、もっと澆刺はっしゅうとして戴かないと」

呻くような声を一笑し、見た目四十に差し掛かるか否かの忠実な奉公人は、灰色の顔を緩めて、よいしょと大儀そうにリンクの横へ腰を下ろした。一応仕えているべき主人の寝具に。

だがそんな些細な動作など気にもとめないリンクは、渋みの利いた面持ちで尚も浮かぬ顔を張り付けている。
スタニスが軽薄な調子で言葉を続けた。

「そうそう理解者は増えないものさ。もとより、常人には理解出来ないような事を信憑性良好かつ矛盾無く知らせるには相当な話術が必要でなあ。東宮様はそれが見受けられない。……口下手な東宮様には、な」

意味有りげに一瞥するその真意を悟り、リンクはなんともいえない表情をつくった。

「それは……、重々承知しておりますよ」

「ん？ そうか？ ならいいんだがな。東宮様は時たま御自身について疎いところがありやすから」

まあ気にするな、とケタケタ笑うスタニスを、今このときばかりは恨めしく思った。

口下手、と下人に指摘されても、今更驚くものでもない。かといって理不尽に憤慨することもなく、寧ろ自身が口下手だという事実には不本意ながら満足していた。

東の霊峰より高き矜持を備えた貴族や王族たちを前に自己主張が過ぎるのは、些か分が悪い。彼等は己の考え抜いた思考がなにより大切で、故にそれが傷付けられたり泥を被るようなことがあらば、額に幾つもの青筋を浮かべ、絞首刑やら多額の罰金云々を安易に命じ、無理強いしても実行しようとする。

そうして人生を失った者も決して少ないとはいえず、毎日のように王都からは身包みを剥がされた廃人達が零れ出てくるわけだ。

廢人に成り下がることは、人間が最も重んずるべき恥とする。

貴族の端くれであるリンクは多生なりに融通が利くけれども、有力な王族を前にすると怒りを買わぬよう細心の注意を払って参らなければならぬ。

無駄に気を遣って申す言葉のひとつひとつを確認するよりも、常から自己の主張を不得意としていた遙かに都合が良かった。

が、反対に饒舌なうえ多大な分野に於いて通曉する口巧者も重宝されている。

例をあげるならこの食べぬ奉公人こそ妥当なのだが、彼は確か異邦の生まれだと聞いた。純血を重んじるハイラルにとって、混血を招く異邦人は避けるべき人種。

そんな異端者が貴族のしたに名を連ねるはずもない。……ない、はずなのだが。

「そういえばスタニスさんは他国から来たっていつてましたよね？」

疑問形なのは、それが確信の持てることではないからだ。

なにしろリンクが産まれたとき、既に彼は英雄を始祖とする血族の、純然たる下男として勤めていた。

純血をなにより大切にし、それ以外の人種を他より輪を掛けて受け付けないはずの一族。殊に父が、なんの経緯があつてこの優男を使用人に就かせたかは何年経つても不明瞭なままだ。

幼少の頃から、異邦人は忌むべき存在だ、とリンクに教え続けてきたのは、あの気高き父だったというのに。

謎大奉公人は、口許を弓なりに歪ませた。

「ああ、その通りですが？　これの何処がかの誉れ高き『天の声を聴く耳』に見えますか？」

ニマリと笑って丸みを帯びた耳を晒す彼の語り草に、リンクは盛

大に息を吐き出した。幾ら主人とはいえ、異邦人だということを隠そうともせず、易々肯定してしまうなんて。

食えぬ素振りは昔から変わりないのだろうか。

スタニスと言う耳とは、リンクのような純血のハイリア人に見られる特色のひとつで、まるで森の小人ドワーフのような、先の尖った特徴的な形容をしている。

確か、古代のハイリア人は天　俗に言う神　の託宣を聞き分ける、又は聴き易くするため独自の進化をしたのだとか。

最近では完全無欠なハイリア人が少なくなってきたため、近代のハイリア人でも特徴的な耳の尖り具合が丸く変化してきているようだが、スタニスのような尖りの「と」の字も窺えない形容をした耳は異邦人そのものの証拠である。

外見の違いがある種族は互いに偏見の目を以て接するのがセオリーだ。大抵は気取られないよう欠点を隠し、原住民を装って、異端者である故に下される死罪から逃れようと暗中模索している。

当然、東からの渡来人であるスタニスも実刑の対象のだが、嘗ての英雄一族の後ろ盾がある分、気兼ねする必要もないのだろう。

03：奉公人は愉快に諭す*1（後書き）

実は急いでフラグを立てちゃったり……。

プロット無しの長編はあまりに無謀過ぎました 三ノ一 /ズサー

通称『脅威』の正体は一部の読者様ならお分かりかと。

殆どのシリーズに出ているであろう、あの哀れな叔父様も登段させたく思いますので^^*

つまあ、最終的に主人公以上のヘタレになってしまいかもしれませぬが……（〇、・・・）三ノ一、- -（ウン

書き終えて思ったひと駒。

『スタニスと言う耳とは、リンクのような純血のハイリア人に見られる特色のひとつで、まるで森の小人ドワーフのような、先の尖った特徴的な形容をしている。』

ドワーフって、耳びょ〜んなのか???

03：奉公人は愉快に諭す*2

「それって、ある意味では僕達を利用してることなんだけどね」

誰ともなく呟いて、リンクは態勢を変えた。硬質な棉の枕にを背を凭れ掛け、スタニスの瘦けた横顔に笑いかける。

応えるように、彼の薄い唇が弧を描いた。

利用されているからといっても、今更悪い気など微塵もしない。鋭い慧眼を備えた父もそれを承知のうえで配下に加えているのだから。

「ああ、そついや傷の具合はどうですか？」

「大分いいですよ。湯に浸かってあまり痛まなかったから、良くなってきたんじゃないかな」

目視をしたわけではないが、傷口がそれほど深くないことはわかっていた。睡魔を退けるため少しいじくったものの、それもなんとか治まり、殊に心配だったのは毒気の方で、その後遺症もすっかり消えている。

リンクが答えると、スタニスはあからさまに安堵の息を吐き出した。

「なら上々だ。実のところ、解毒の経験は丸きりなかったんでね。いやあ、御上の薬が上出来だったのか、はたまた時の運か」

綽々と朗らかな笑顔で、驚くべき事実を語り出したスタニス。次々と明らかになっていく本音は、リンクの表情を瞬時にして凍らせ

た。

にこりと破顔した少年の面持ちが徐々に引き連れる。そんな主人の様子を知ってか知らずか、スタニスはさも愉しげに口頭を続ける。

「まあ何はともあれ、無事帰って来れてよかったですなあ。あの辺りは沼蛙の巣窟らしいじゃないですか。あの半両生類共といやあ、獲物を溺死させるってことで有名でしょ？ 衰弱した獲物の肛門から体内に侵入して、五臓六腑を内側から捕食するらしいし、なんともえげつない野郎だ。……つま、今回の任務を東宮様に直接下したのは、紛れもない、あの親方様なのですがね」

リンクの片眉がぴくりと反応する。奉公人はその僅かな仕草を見過ぎさなかつた。

「大体、正式に騎士団に入ったわけでもなんでもない十三歳の自称半人前を、化け物退治に向かわせる奴らの神経がおかしい。しかもちよつくら行ってこい、みたいな取り分け軽やかな口調で言われちまったからなあ。どうせ怒りのやりどころが判らず、堪忍袋とやらに溜めてたんでしょう?」

反対側の背凭れに寄りかかって、スタニスがお得意のにんまり顔で微笑んだ。世間から芳しいこの笑顔も、空気によっては愉悦なものから憤激の切欠にも成りうる。

今正にとれたのが後者の方で、青筋の浮かんでいた面持ちが音を立てて砕氷された。

ついと横目に見やると、彼の薄い肩が面白いほどに震えている。やがてリンクは、口元を緩めながら首を僅かに傾けて目許に陰を被せると、線の細い笑顔を漏らし始めた。

「ふふ……、へへ、へへへへ………」

03：奉公人は愉快に諭す*2（後書き）

今回も最後までお読み戴き有難う御座います。

その行為と御時間に恐悦の意をぐ（、、、、）ノ

今までより異質な主人公を書けるよう、最近は気に掛けております。人間嫌いかつ都会嫌い。ねこを被るのが上手く、おまけに怒れる暴君となると途端に怪力と成る。

それに付き添うは、弁舌の才に長けた喰えぬ奉公人がひとり。

まだまだ従人は出現する予定ですが、やはり愉快的旅連れとなればと思っている所存です（、、人）（）（殴

まあこういった奴等を書くのは大好きなんで（）（自重

それでは、今後とも宜しくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0697t/>

ゼルダの伝説 陰陽の楔

2011年10月6日17時31分発行